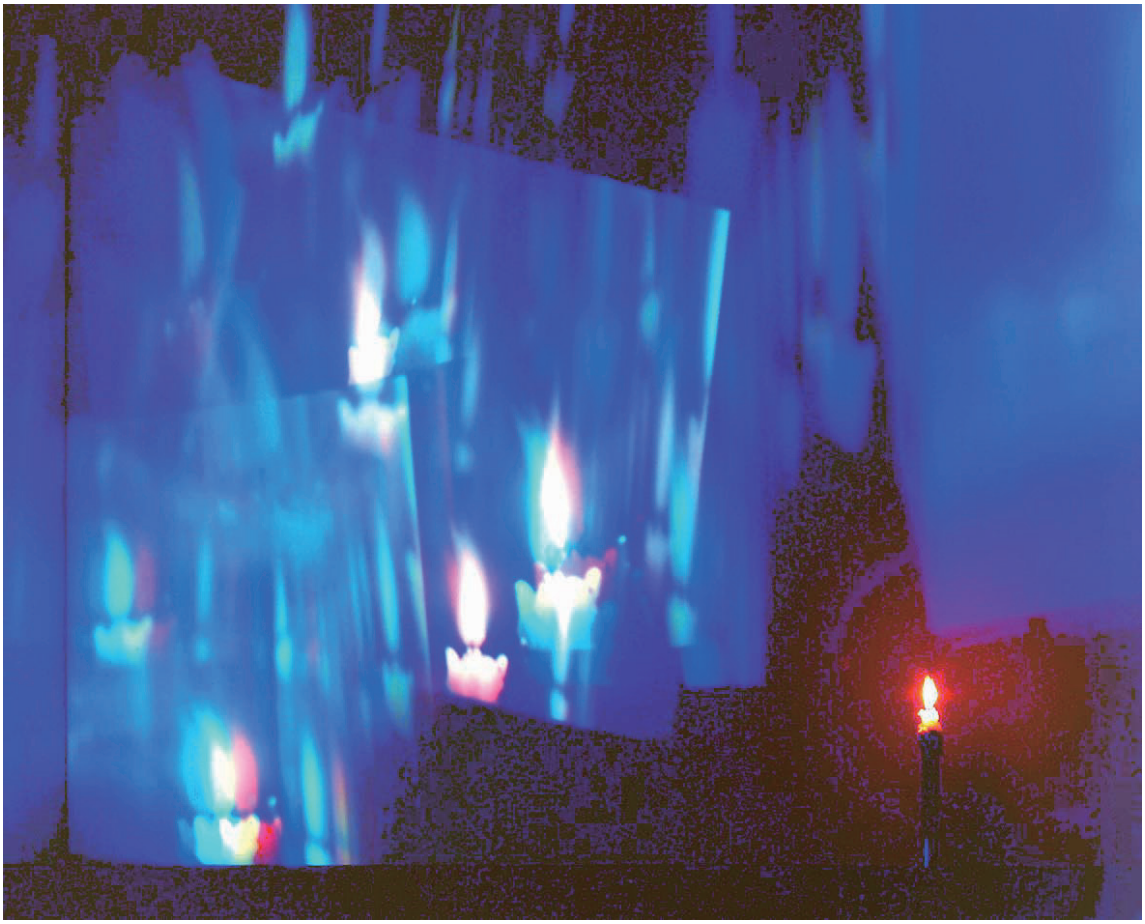


ニュー・キャンドル／ 1993 ／
ろうそく、ろうそく立て、カメラ1 台、ビデオプロジェクター 4 台／ 500×310cm

## 没後20 年

# ナムジュン・パイク｜じゅげむ展

## 会期：2026 年7 月19 日［日］- 11 月23 日［月・祝］

休館日：月曜日（9/21、10/12、11/23 は開館）　開館時間：11 時より19 時まで
入館料：大人 1,500 円 / 大人ペア 2,600 円 / 学生（25 歳以下）・高校生・70 歳以上の方・身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳お持ちの方、および介助者（1 名様まで）1,300 円 / 小・中学生 500 円

主催：ナムジュン・パイク展実行委員会

会場：ワタリウム美術館

展示協力：株式会社日本観賞魚サービス

ワタリウム美術館　〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6
Tel：03-3402-3001　Fax：03-3405-7714
Email：official@watarium.co.jp　URL：http://www.watarium.co.jp

WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art

**寿限無、寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の、水行末・雲来末・風来末、食う寝るところに住むところ、やぶら小路のぶら小路、パイポパイポ、パイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの、長久命の長助**

ナムジュン・パイク　草月ホール　1978年5月26日　撮影：安斎重男

── 落語の前座噺・寿限無は、子どもの長生きを願ってとにかく長い名前をつけた笑い話。
ここ、ワタリウム美術館、前身となるギャルリー・ワタリで生まれた作品たちも、気づけば半世紀の時間を重ねてきた。時代はブラウン管から液晶、4K、LEDディスプレイへと進化を続けている。それでもパイクの作品は色褪せない。むしろ時代が進むにつれ、パイクの斬新さは際立つ。映像から響く音、一見ユーモラスでありながら現代の問題を鋭く突く作品たち ── ビデオはただの映像表現ではなく、革新的な手法そのもの。パイクはいつも、すぐそこで笑っているように感じる。時代が移ろい、価値観や社会問題が変わろうとも、パイクは常に新しい視点を私たちにみせてくれる。

## 創造ということは、肉体的な創造でも精神的な創造でも、ある神秘的超越を媒体としている。（ナムジュン・パイク）* ──

*『Feed back と Feed forth 』1993より

作品は生まれた瞬間から時が止まるものではなく、時代を超越し、常に変化し続ける。パイクの作品たちも、寿限無のように長く、長く生き続けてほしい。そして作品たちを次世代に伝えていくこと、それが美術館の役目なのだと思う。

## 主な展示作品

展示会場2～4F全てをパイクの作品で構成します。
2Fではワタリウム美術館の展示会場に合わせて作られた作品「ケージの森/森の啓示」(1993)を拡げ、2F全体を森で覆います。実際の木々が使用されることで造られた植物では体験することのできない匂い、変化していく、生きた植物空間をつくりあげます。この森の中に、パイクの代表作「時は三角形」(1993)、「ロボットK-567」(1993)などの立体作品を織り交ぜることで自然と文明の相反する二つの共存を表します。
3Fでは未公開のコラージュ作品をはじめ、20点以上のパイクの平面作品を中心に、「TV植物」(1980)など、ブラウン管を用いた立体作品、パイクの発想の源であるドローイングを展示します。
4Fでは三原色で壁に大きく映し出される蝋燭「ニューキャンドル」(1993)を会場全体に展開します。そのほかにも「心」にまつわる作品を5点ほど展示し、2Fから4Fの吹き抜け空間にはLEDパネルでパイクの詩の作品「for Mr. I & Mr. I」(1964)を流しパイクのハートを展示全体に届けます。

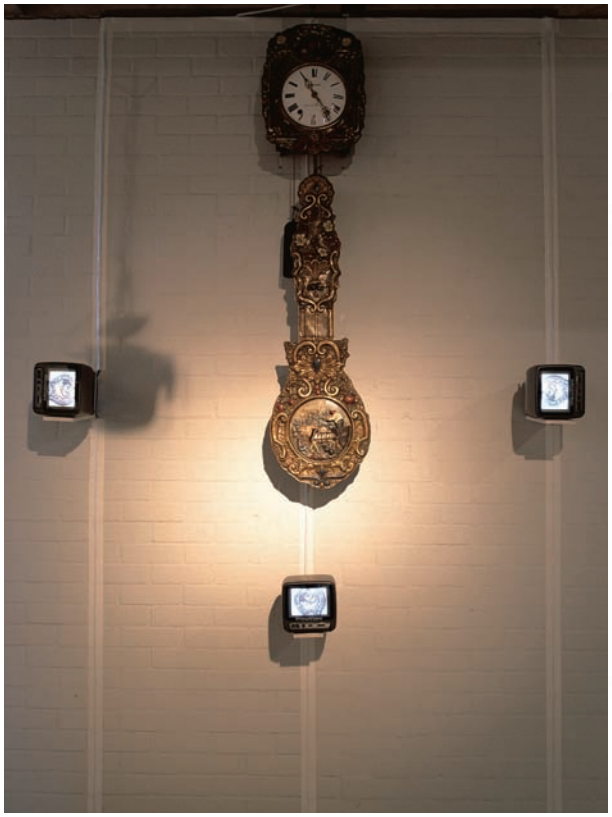
# 2F　森

### ― フィード・バックとフィード・フォース　現在→無限 (ナムジュン・パイク)* ―

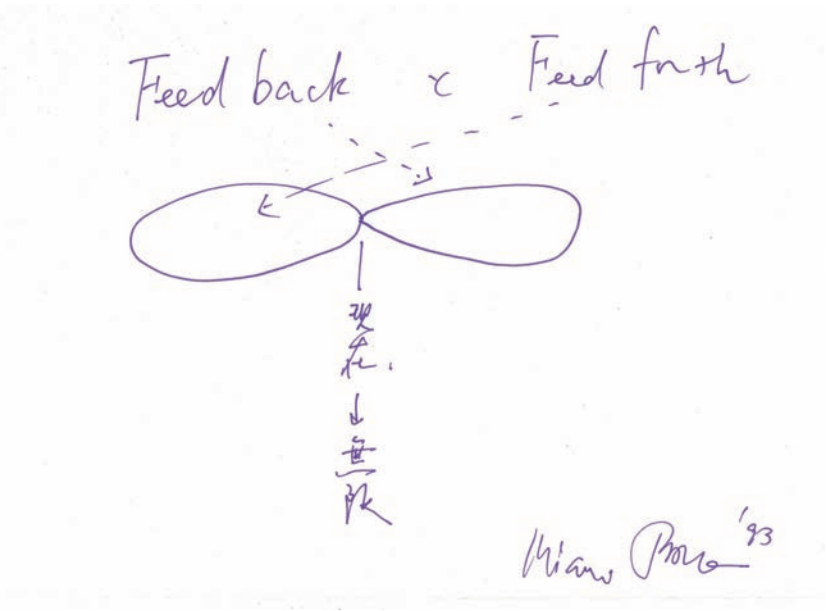
*『Feed back と Feed forth 』1993より

森に迷い込むと、時間の進み方に戸惑う。
朝早く飛び込むとすでに多くの生き物が活動を始めていて、陽が沈むと、一気に静まり返る。夜の森に立つと、時が止まっているように感じる。
急速に変化する文明の「今」と、緩やかに移ろう自然の「今」とでは、時間の流れ方に大きな隔たりがある。私たちが過去だと思う出来事は自然界では今に等しく、私たちが遠い未来だと思う出来事も自然界では過去なのかもしれない。過去も未来もない。「今」が無限に続いている。時間はただ流れるのではなく、過去も未来も幾重に折り重なり、交差し合っている。
ワタリウム美術館の展示会場に合わせて作られた作品 ―「ケージの森/森の啓示」(1993)―。
木々の中で流れる映像たち、異なる時間が溶け合い、無限に広がる今があるだけ。
森の中では、パイクは生きていて、あるいはまだ生まれてすらいないのかもしれない。

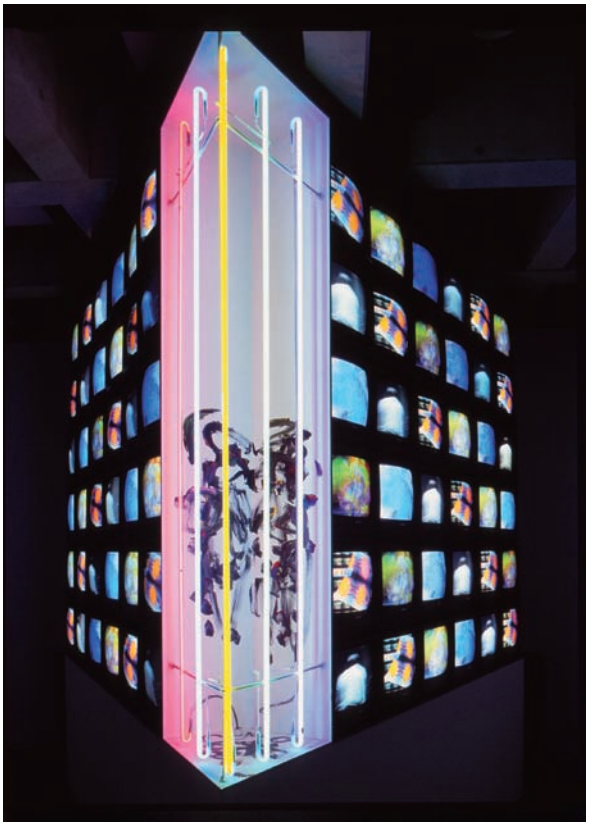
ケージの森/森の啓示／ 1993 ／
植物、モニター 20台、映像3チャンネル、
再生機3台、ステレオ1組／
554×465×800cm



フレンチ・クロック／ 1993 ／
フランス製アンティーク時計、金属棒、カメラ1 台、
三脚1 台、木製板、モニター 3 台／ 160×280（床から）×30 ㎝




「Feed back と Feed forth」原稿の表紙／ 1993 ／
紙にペン／ 29.7×21cm



時は三角形／ 1993 ／
ネオン管5 本、木製台、アクリル絵具、
モニター 72 台、映像4 チャンネル、再生機4 台／
262（右、左辺） ×240（後）×269（高さ）㎝

## 3F　縁

### ── これからのコミュニケーションは、多彩な因縁をつけることである（ナムジュン・パイク）*──

*福岡市立美術館・松浦仁編『ナム=ジュン・パイク展』1994 より

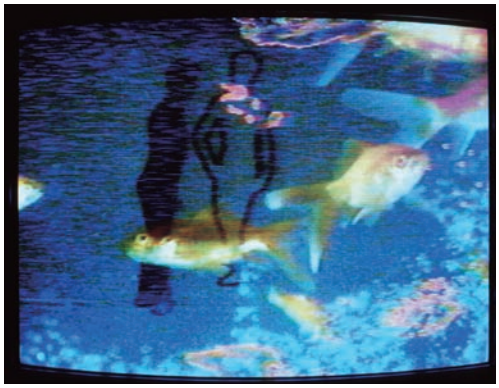
1984 年、パイクは世界同時配信のサテライトアート「グッド・モーニング・ミスター・オーウェル」を発表。4 カ国、3 大陸で生配信され、2500 万人以上の観衆を獲得、ビデオアートの可能性はさらに広がった。

“袖ふり合うも多生の縁”といわれるが、サテライトや双方向TVによって、今生の縁は何千倍に拡がった。（ナムジュン・パイク）*

*『タイム・コラージュ』1984 より

そして今日、スマートフォンの普及によって、その“縁”はさらに何万倍にも拡がっている。“縁”は、人間同士のつながりに限られない。風景を見てよみがえる記憶、動物とふれあったときの懐かしさ、過去の作品や映像から生まれる新たな感情やインスピレーション── そうしたものすべてが“縁”。
くじらは死後、100 年もの間海底で多くの生物に影響を与える「鯨骨生物群集」という現象を生む。─「フルクサスくじら」（1976）─。パイクの作品の前に立つとき、私たちはすでに新しい縁の中にいる。

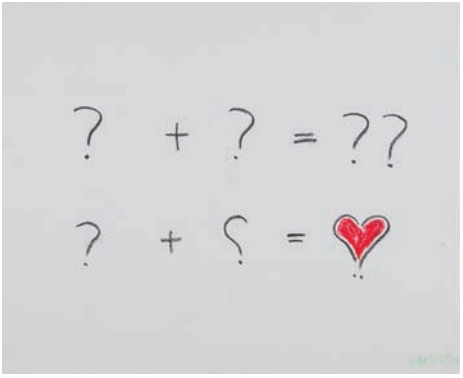
OK はKO ではない（あるいは「TV BULL」）／ 1982-84 ／
キャンバスに油彩、コラージュ／ 56×71cm



TV フィッシュ／ 1975 ／
熱帯魚、水槽、モニター、映像1 チャンネル、再生機1 台／サイズ可変

## 4F　心

### ── アーティストの仕事は未来について考えること（ナムジュン・パイク）* ──




*
「ランダム・アクセス・インフォメーション」1980（『バイ・バイ・キップリング』リクルート 1986）より、ニューヨーク近代美術館での「ビデオ・ヴューポインツ」の一環として行われた講演にもとづき、同館のビデオ・キュレイター、Barbara London がまとめ『ARTFORUM』（1980 年9 月号）に発表

返る心／ 1988 ／白い紙にパステル
／ 58.5×77.5cm

パイクは「ココロ　コロコロ」から始まる詩で心を詠んだ。─「for Mr. I & Mr. I」（1964）─。心が跳ねる、心が沈む、喜怒哀楽と変化する「心」を表す表現は古今東西、無数に存在する共通のもの。そんな、コロコロと揺らぐ心はまるで火のようでもある。形をとどめず、時にしぼみ、時に燃え盛り、やがて次の世代へと受け継がれていく。
同じ作品でもそのときの心次第で随分と見え方が変わる。一度見た作品も年をとれば見え方が変わり、昔見た作品から当時の記憶を呼び起こすこともある。時代も価値観も世界も自分もコロコロと変わる中、それでも変わらない思いは確かに存在する。パイクがワタリウム美術館に残した心を未来に伝えることで、過去のものとして保存するのではなく、今を生き続けることになる。

# ナムジュン・パイク

# （Nam June Paik、白南準 1932年7月20日-2006年1月29日）

1932年　7月20日　ソウルの裕福な家庭に生まれる
1949年　父と共に香港へ移住
1950年　韓国に一時帰国中、朝鮮戦争が勃発　戦火を逃れた一家は釜山から船で神戸に渡る
1951年　一家は鎌倉市へと移住
1952年　東京大学教養学部分科II科に入学
1954年　東京大学文学部美学・美術史学科に進学（56年3月卒業）
1956年　20世紀美術を学ぶため渡独／ミュンヘン大学に学ぶ
1957年　フライブルグ音楽院で作曲を学ぶ／カールハインツ・シュトックハウゼンと出会う
1958年　ケルン大学へ入学　ダルムシュタット夏季現代音楽講習会でジョン・ケージと出会う
　　ケルンの西ドイツ放送局WDRの電子音楽スタジオで働き始める
1959年　デュッセルドルフのギャラリー22で初めてのパフォーマンス『ジョン・ケージに捧ぐ』を上演
1961年　フルクサス運動の創始者ジョージ・マチューナスと出会う
　　以後、フルクサス運動の中心的存在として活動　ヨーゼフ・ボイスに出会う
1963年　世界初のビデオアートをヴッパータールのパルナス画廊での個展『音楽の展覧会 - エレクトロニック・テレビジョン』にて発表
　　カラーTVの研究のため日本に一時帰国　阿部修也と出会いロボット『K-456』を制作する
1964年　帝国ホテルでのハイレッド・センターによるイベント『シェルター・プラン』に観客として参加
　　渡米しチェリストのシャーロット・モーマンと出会いパフォーマンス『ロボット・オペラ』が生まれる
1967年　ニューヨークで『オペラ・セクストロニック』を上演中、トップレスでチェロを弾くモーマンが下半身を脱ぐ直前、公然わいせつ罪で逮捕される
1971年　パイク=アベ・ビデオ・シンセサイザーが完成
1976年　ケルン芸術協会で大規模な個展『ナムジュン・パイク 1946-76 / 音楽・フルクサス・ビデオ』開催
1977年　ビデオアーティストの久保田成子と結婚
　　ドイツの美術展『ドクメンタ6』に参加、ワタリウム美術館初代館長の和多利志津子と出会う
1978年　デュッセルドルフ美術アカデミーで教鞭を取る
　　ヨーゼフ・ボイスとのパフォーマンス『ジョージ・マチューナス追悼・ピアノ・デュエット - ボイスとパイク』を上演
　　ギャルリー・ワタリ（現・ワタリウム美術館、以後G・ワタリと記す）で個展『ジョン・ケージに捧げる』開催
1979年　デュッセルドルフ美術アカデミーの教授に就任（96年まで）
1980年　G・ワタリで個展「VIDEAいろいろ」開催
1981年　G・ワタリで個展「ビデオ・カード」開催
1982年　ホイットニー美術館で大回顧展を開催
1984年　サテライトアート『グッド・モーニング・ミスター・オーウェル』を発表
　　東京都美術館で『ナムジュン・パイク展 ビデオ・アートを中心に』を開催／同時期に来日したヨーゼフ・ボイスと共に草月ホールにてパフォーマンスを行う
　　G・ワタリで「ヨーゼフ・ボイス&ナムジュン・パイク」展開催
1986年　G・ワタリで「パイク　ワタリ二重奏」開催
1988年　ソウル・オリンピックのためにTVタワー『多々益善 』制作
1992年　ソウルの国立現代美術館で大規模な「ナムジュン・パイク回顧展」開催
1993年　東西統一後初となったドイツパビリオンをハンス・ハーケと共に代表し第45回ヴェネチア・ビエンナーレにて金獅子賞を受賞
　　ワタリウム美術館で新作個展『パイク地球論』開催
1996年　脳梗塞で倒れ、以後車椅子生活となる
1998年　京都賞を思想・芸術部門にて受賞
2000年　ニューヨーク、グッゲンハイム美術館で大回顧展を開催
2006年　1月29日マイアミの自宅にて逝去。享年73歳
2008年　ソウル近郊にナムジュン・パイク・アートセンターが創設
2009年　スミソニアン・アメリカ美術館がナムジュン・パイク・アーカイブを創設
2010年　テート・リバプールにて大規模回顧展開催
2013年　スミソニアン美術館にて大規模回顧展「グローバル・ビジョナリー」開催
2019~2022年　テート・モダンとサンフランシスコ近代美術館が共同企画した大規模巡回展「The Future Is Now」開催
2024年　釜山現代美術館にて大規模回顧展「Nam June Paik, Nam June Paik, and Nam June Paik」開催

## 関連企画

# シンポジウム
# 「パイクのVIDEAいろいろ2026」

**開催日 |**

**2026年7月20日（海の日） 13:00-16:00**

**会場 | 善光寺　東京都港区北青山3-5-17**

**出 演（予定）|**

**浅田彰** 批評家/哲学者

**落合陽一** メディアアーティスト

**八谷和彦** メディアアーティスト

**主催 | ワタリウム美術館**

「ケージの森／森の啓示」
の前に立つナムジュン・パイク
1993年
撮影：坂田栄一郎

パイクがこの世を去ったのは2006年、今年は没後20年となります。
シンポジウム「パイクのVIDEAいろいろ2026」は、多くの作品と思想を遺し、
21世紀のアートの礎を築いたパイクについて語りながら、さらに未来を考えます。

アートには2つの機能がある。
一つはよろこび、エクスタシーをみせる。
一つは未来を考える、つまり自由がある。
（ナムジュン・パイク）1992年 TBSニュース23より

---

## 関連書籍

**「ナムジュン・パイク展」にあわせた**
**書籍企画を進行中**
**2026年秋刊行予定**

**日英バイリンガル**

**出版 | twelvebooks**

パッセージ／ 1986 ／
ヴィンテージ・テレビ用キャビネット8台、
モニター 13台、映像2チャンネル、再生機2台／
300( 蓋を閉じた状態) ×330×61㎝